



学芸員が厚真町の歴史を解説します!

厚真日誌

まちの学芸員 **乾 哲也**

小学校6年生の社会科の授業で考古学に目覚め、札幌学院大学卒業後、奥尻町、白老町、礼文町、千歳市で発掘調査を行う。平成14年から厚真町に根差した学芸員。



第3回

北海道150年のキーマンが見た160年前のアツマ〔3〕 松浦武四郎が歩いた厚真川上流域の様子

北海道の名付け親、松浦武四郎は安政5年(1858年)

6月21日に苫小牧勇払会所から厚真のトンニカ村(現・富里)に入り3泊ほどしています。この時の記録を「東西蝦夷山川取調日誌」や「東蝦夷日誌」に記しています。

「たくさんのお宝があった厚真」
武四郎が宿泊したトンニカ村の家には、シントコや蝦夷太刀、短刀などの宝物がたくさんあり、とても豊かな集落で驚いたことを書き残しています。



宝物のシントコ(漆塗りの容器)

「おいしいアワ団子」

宿泊した家で夜食にアワ団子を7つほどいただき、2つを食べて、あまりにもおいしかったので残りの5つは翌日の楽しみに包んで取っておいと記しています。

「神の使いのカモメ」
高丘地区は、昭和32年まで頗美宇と呼ばれ、アイヌ語のカピウ(カモメ)から名づけられた地名でした。この地名について、「過去に大津波に襲われるも、カモメのおかげで村人たちの命が助かり、カモメを神の使いとして奉った」との言い伝えに由来すると記しています。

「水害を見舞った松浦武四郎」
厚真川の洪水により、家中に水が流れ込み、畑が押し流された人々に武四郎は針や糸、玄米やみそなどを渡しています。また、厚真を出発する時には勇払会所に被害状況を報告し、何らかの措置を講ずるよう促しています。

厚真の大切な歴史

昭和32年に松浦武四郎の来村百年を記念して、富里地区に石碑が建てられました。
厚真村郷土研究会が主催、70人以上の町民の寄付金により建設された石碑は、昭和57年に厚真町記念物第7号に指定され、今も松浦武四郎の功績を伝え続けています。



▶松浦武四郎之碑

北海道内には松浦武四郎にまつわる石碑や銅像、説明板が56カ所あり、富里の石碑は5カ所目に建てられたもの。多くの武四郎ファンや地域の方々の思い出がある石碑です。

◀松浦武四郎之碑の除幕式 (佐藤泰夫さん(富里)提供)
昭和32年11月3日の除幕式には大人から子どもまでたくさんの人々が参列しました。



▲石碑建立に携わった人々 (佐藤泰夫さん(富里)提供)



▲石碑横を流れる頗美宇川に架かる松浦橋

教育委員会では、7月に北海道150年記念事業の一環として松浦武四郎に関する講演会やバスツアーなどを実施します。

詳しくは11ページをご覧ください。



2018年は北海道150年
Hokkaido's 150th Anniversary